

《教育相談》

主体的な活動を通して、社会的に自立できる子の育成 ～自己肯定感を高めるための個別最適な支援を通して～

那覇市立城西小学校教諭 山入端 由起子

〈研究の概要〉

不登校児童生徒が、自立支援教室「きら星学級」で自己肯定感を高めるためにどのような支援を行えばよいのか。本研究では三つの方策を立て、その有効性を検証した。

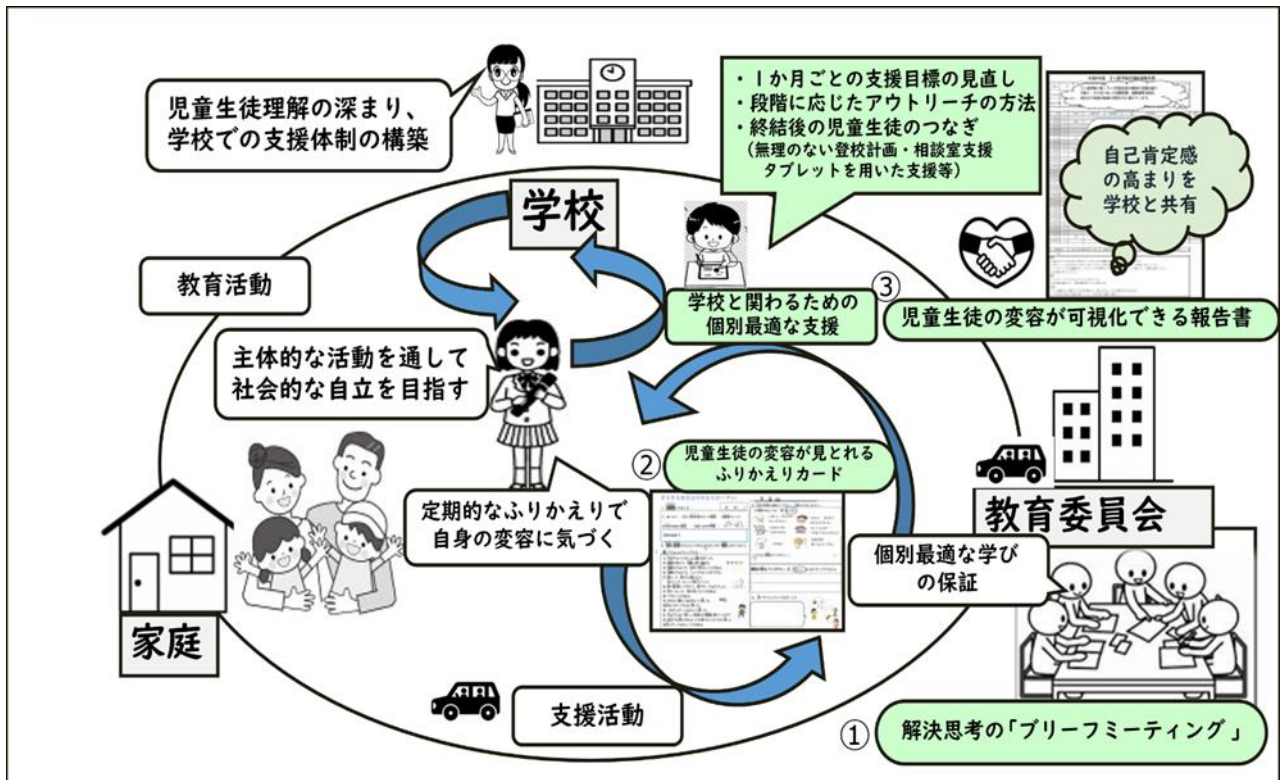
第一に支援者による解決思考の「ブリーフミーティング」を定期的に行い、多面的、多角的な視点を持ち、支援計画を作成したことにより、児童生徒は個の特性に応じた支援を受けることができた。参加した支援員のアンケート結果からも「ブリーフミーティング」を行うことが個別最適な支援の計画に必要であると全員が回答していた。

第二に児童生徒の内面を見とる「ふりかえりカード」の内容を工夫することである。児童生徒は定期的にふりかえりを行うことで自身の変容に気づき、支援終了後、自身の日常生活に新しいイメージを持たせることができた。学校は、支援終了後のアンケートで「ふりかえりカード」を確認することで児童生徒の理解に繋がったと回答していた。

第三に児童生徒の変容が可視化できる報告書を作成することである。報告書の内容からは、支援を通しての児童生徒の自己肯定感の高まりやその他の変容について児童生徒、支援員、学校が共通理解のもとにステップアップした支援が行えた。

このことから、児童生徒にとって個別最適な支援を行うことが児童生徒の自己肯定感を高め、主体的な活動へ繋がり、社会的自立に向けた子の育成ができたと考える。

〈研究のイメージ〉



目 次

I	テーマ設定理由	81
II	研究目標	82
III	研究仮説	82
1	基本仮説	
2	作業仮説 (1) (2) (3)	
IV	研究構想図	82
V	研究内容と方法	83
1	主体的な活動を通して、社会的に自立できる子の育成のために	
2	個別最適な支援の進め方	
(1)	個別最適な支援	
(2)	「ふりかえりカード」の活用の工夫	
(3)	解決思考の「ブリーフミーティング」	
(4)	児童生徒の変容が可視化できる報告書	
VI	結果と考察	86
1	「作業仮説 1」の結果と考察	【結果】【考察】
2	「作業仮説 2」の検証	【結果】【考察】
2	「作業仮説 3」の検証	【結果】【考察】
VII	成果と課題	90
1	成果	
2	課題	
	《主な参考文献》	

主体的な活動を通して、社会的に自立できる子の育成 ～自己肯定感を高めるための個別最適な支援を通して～

那覇市立城西小学校教諭 山入端 由起子

I テーマ設定の理由

文部科学省の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査結果」(令和3年)によれば、「長期欠席」とは、年間に30日以上欠席した児童生徒をいい、その数は小・中学校で約41万3千人である。そのうち、不登校児童生徒数の数は小・中学校で約24万5千人であり、新型コロナウイルス感染回避による長期欠席者は、5万9316人である。また、1000人当たりの不登校児童生徒数は25.7人、令和2年度が20.5人であり、これは8年連続で増加傾向を示し、令和3年度は過去最多である。さらに、この不登校児童生徒のうち、「90日以上欠席したもの」が55%を占めており、長期に及ぶ不登校児童生徒が多く、全国的に深刻な状況である。沖縄県でも1000人当たりの不登校児童生徒数が29.4人、そのうち「90日以上欠席したもの」が45.1%を占めており、全国と同様に厳しい状況が見受けられる。

これまで学級担任として不登校または登校しぶりのある児童生徒や登校できても教室に入ることが難しい児童生徒を目の当たりにしてきた。そこで保護者との電話連絡や子ども寄添支援員(SSW)(以下「SSW」という)と連携した、定期的な家庭訪問を行ってきた。また、SSWや教育相談支援員に登校支援を依頼し、スクールカウンセラー(SC)(以下「SC」という)と保護者の面談を設定することで、保護者からのニーズを把握し、家庭に寄り添った組織的な支援が必要であることが見えてきた。組織的な支援が始まると、一時期は登校するが、しばらくすると登校しぶりや欠席がはじまり、不安定な登校状況を繰り返すことになっていた。このような状況の中で児童生徒の気持ちや保護者の気持ちに寄り添った支援になっていたのか疑問が生じた。そこで、より効果的な支援方法がどのようなものかを考えた時に学校職員がチームとなり、SSWやSCと情報を定期的に共有し、児童生徒の今後の支援について、連携していくことが必要であると感じた。

本年度、教育相談課、自立支援教室「きら星学級」の学級経営の中で、この状況を少しでも改善するためには、次の三つの方策が必要だと考えた。第一に、個別最適な学びを保証するために、定期的に解決思考の「ブリーフミーティング」(注1)(以下「BM」という)をチームで行うことである。多面的・多角的な視野からの支援計画を作成することで、支援方法の選択の幅が広がり、児童生徒は個の特性に応じた支援につながると考えた。第二に、児童生徒の内面を見とる「ふりかえりカード」の内容を工夫することである。「ふりかえりカード」を活用することによって、支援する側は児童生徒の理解の手掛かりになり、児童生徒は自身の変容に気づくことで自己肯定感が高まると考えた。第三に、きら星学級での支援による児童生徒の自己肯定感の高まりやその他の変容について、具体的に可視化できる報告書を作成することで児童生徒・学校・教育相談課でつながりを持った支援となると考えた。

そこで本研究では、那覇市立教育委員会、自立支援教室「きら星学級」の支援において、

「個別最適な支援」を考えるために解決思考の「BM」を定期的に行うこと、児童生徒の内面を見とる「ふりかえりカード」の活用を工夫すること、児童生徒の変容が可視化できる報告書を作成し、共有することで、児童生徒の自己肯定感が高まり、主体的な活動を通して、社会的な自立に向けた支援へと繋がることができると考え、本テーマを設定した。

(注1)ブリーフセラピー(短期療法)の考え方に基づき、「変化を起こすこと」によって課題を解決していく会議である。Ⅴ研究内容と報告にて詳しく説明する

Ⅱ 研究目標

主体的な活動を通して、社会的に自立できる子の育成を行うために、自己肯定感を高めるための個別最適な支援について研究し、その有効性を検証する。

Ⅱ 研究仮説

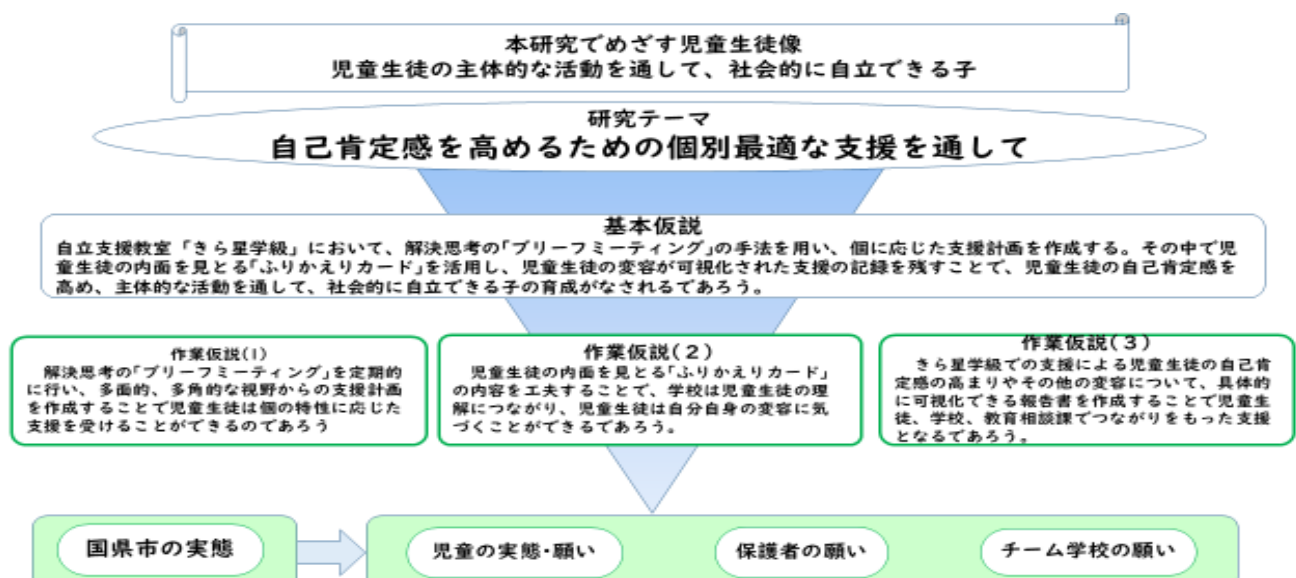
1 基本仮説

自立支援教室「きら星学級」において、解決思考の「BM」の手法を用い、個に応じた支援計画を作成する。その中で児童生徒の内面を見とる「ふりかえりカード」を活用し、児童生徒の変容が可視化された支援の記録を残すことで、児童生徒の自己肯定感を高め、主体的な活動を通して、社会的に自立できる子の育成がなされるであろう。

2 作業仮説

- (1)解決思考の「BM」を定期的に行い、多面的・多角的な視野からの支援計画を作成することで児童生徒は個の特性に応じた支援を受けることができるのであろう。
- (2)児童生徒の内面を見とる「ふりかえりカード」の内容を工夫することで、学校は児童生徒の理解につながり、児童生徒は自分自身の変容に気づくことができるであろう。
- (3)きら星学級での支援による児童生徒の自己肯定感の高まりやその他の変容について、具体的に可視化できる報告書を作成することで児童生徒、学校、教育相談課でつながりをもった支援となるであろう。

Ⅳ 研究構想図



V 研究内容と方法

1 主体的な活動を通して、社会的に自立できる子の育成のために

不登校に関する調査研究協力者会議報告書～今後の不登校児童生徒への学習機会と支援の在り方について～(令和4年6月)は次のように指摘する。

c.不登校児童生徒の将来を見据えた支援の在り方において、不登校児童生徒への支援の目標は、児童生徒が将来的に精神的にも経済的にも自立し、豊かな人生を送れるよう、その社会的自立に向けて支援することである。その意味からも、不登校児童生徒への支援は、教育機会確保法の基本的な考え方である学校に登校するという結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自ら進路を主体的に捉え、社会的自立を目指せるための支援を行うことが必要である。(中略)

子供たちが自らの人生を納得して、より良く充実したものにすることができるよう、またデジタル化の進展やアフターコロナの世界における様々な変化にも対応できるよう、生きる力を育んでいくことが大切であり、学校や教職員をはじめ子供たちを取り巻くすべての大人が狭義の学校復帰に留まらず、多様な価値観や社会的自立に向け目標の幅を広げる支援が必要である。

そのために本研究では、波線部をきら星学級での児童生徒への支援と捉える。まず、児童生徒の意思や主体性を尊重する安心できる支援者と出会い、多様な支援を実施することで児童生徒が内面的なエネルギーを高め、意欲的に活動を行うことができる。その中で児童生徒は、活動の場を自宅内から自宅の外へとステップアップし、様々な体験と学びを通して、社会的な自立に繋がると考える。そのために個別最適な支援とは何かをきら星学級支援員で考え、支援計画を作成していくこととする。

2 個別最適な支援の進め方

(1) 個別最適な支援

令和3年「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～答申では、目指すべき新しい時代の学校支援の姿として「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学び」とした。この中では、ICTの活用と少人数によるきめ細やかな指導体制の整備により、「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念である「個別最適な学び」と、これまでも「日本型教育」において重視されてきた「協働的な学び」とを一体的に充実することを目指している。

「個別最適な学び」について「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理されており、児童生徒が自己調整しながら学習を進めていくことができるよう指導することの重要性が指摘されている。

このことから「きら星学級」では、「個別最適な支援」の実施に向けた児童生徒の理解及び、支援の個別化が求められる。また、「個別最適な支援」の実施にあたっては、児童生徒の興味関心等を

踏まえた支援計画が必要であり、支援後の児童生徒のふりかえりも重要となってくる。

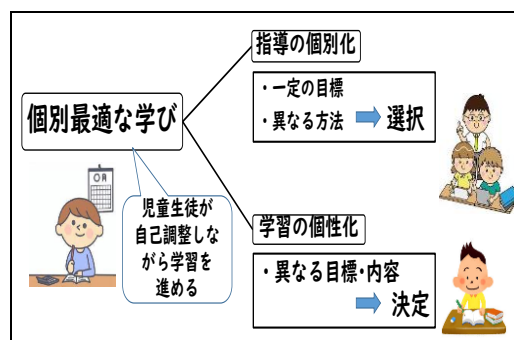


図1 個別最適な学びとは

このような支援計画と児童生徒のふりかえりを繰り返し見直すことで児童生徒の自己肯定感が高まると考える。

(2)「ふりかえりカード」の活用の工夫

きら星学級では、3ヶ月の支援を週2回行うことを基本としており、支援の際に児童生徒が定期的に「ふりかえりカード」を記入している。自分の現状を確認する場や機会を設定することが自己理解や自己受容をすることに繋がるため、「ふりかえりカード」の内容構成には工夫が必要である。不登校児童生徒の中には「書くこと」が苦手な場合も多く、必要最低限の記入にすることや文字だけではなく図等も加えて児童生徒が理解しやすくする工夫が重要である。

また、図2の2では児童生徒の内面を見とるために14の項目を設けている。項目の内容として、①～⑦は支援における活動について、⑤⑥は家庭の様子について、⑨⑩は次の活動について、そして、⑧⑪⑬⑭の項目が自己肯定感につながる気持ちを表しており、⑫の項目が自己の変容について表している。

図3の3ではこれまでの気持ちの変化を知るための選択肢を13項目設けた。前向きな感情だけでなく、そうではない感情も選択肢に設け、児童生徒及び支援員が活動を振り返り、次の支援や活動の参考資料となると考えた。児童生徒は、定期的に「ふりかえりカード」へ記入することで自己確認し、支援員からの声掛けによって、自己肯定感の高揚につながると考える。そして、学校も「ふりかえりカード」を確認することで、児童生徒の内面がきら星学級でどのように変容していったのかを知り、支援終結後、学校による個別最適な支援の手掛かりとなる。

(3)解決思考の「ブリーフミーティング」

「ブリーフミーティング」(以下、BM)は、「変化を起こすこと」によって課題を解決していく会議方法である。「BM」は、ブリーフセラピーの考え方を基にしており、精神科医ミルトン・H・エリクソン(Milton H. Erickson

2 これまでの活動(かつどう)でどんなことをがんばりましたか?
番号(ばんごう)に○をつけよう。(何でもえらんでいいですよ)

- ① これまでにやることのじゅん番が分かった
- ② 時間を考えて、活動に取り組めた
- ③ 活動をするとき、自分で考えたことがある
- ④ 活動をするとき、くふうすることができた
- ⑤ 前もって、家の人に聞いたり、本やインターネットで調べたりした
- ⑥ 家で練習してきたり、家でやってみたりした
- ⑦ 分かったこと、気が付いたことがある
- ⑧ 何かできたことがある
- ⑨ だれかに教えてあげたいと思った
- ⑩ 次はうまくできると思った
- ⑪ これからやってみようと思った
- ⑫ 今までにない新しい気持ちや感覚を持つことができた
- ⑬ 自分でも何かやれることが見つかりそうだと考えた
- ⑭ つぎにやってみようと思うことがある

図2 きらきら☆「ふりかえりカード」一部抜粋

3, 今日の気持ちを教えてください。気持ちに○をつけよう。

♡ 気持ちのヒント ♡ 例: まんぞく

- ・うれしい・きもちよい
- ・たのしい・まんぞく
- ・もっとやりたい
- ・わくわくする
- ・ドキドキする
- ・つかれた
- ・ちやうとにがて
- ・つぎはべつのがしたい
- ・まあまあだ
- ・思ったよりいいかも

ここにない時教えてください。()

図3 きらきら☆「ふりかえりカード」一部抜粋

表1「ブリーフミーティング」と従来の会議との違い

	今までの会議	ブリーフミーティング
時間	長時間かかることも	わずか30分
準備	会議にも長時間要しタイムロス	書類作成の必要なし
事後報告	報告にも長時間を要し、タイムロス	困っていることを5分間で話す
解決のための対応策	出てこないから絞り込まず、原因追及で終わりがち	たくさん出てくる!だから選べる! *解決思考*
ゴール	抽象的であいまいになりがち 例: 支援員と学校に登校してみる	具体的に数値化されている 例: 週に1回、支援員と登校してみる。 月に1回、母親と登校できる。
途中参加者への対応	これまでの説明が必要	ホワイトボードを見れば分かる
会議の記録	人によって記録内容が違う	デジカメを撮って同じ記録を共有

M.D. 1901-1980)の臨床実践に何らかの影響を受けて発展してきた短期療法の総称である。エリクソン博士は、「人々の行動や思考は強固にパターン化されている」と考え、「このパターンを破壊することは、最も治療的な方法の一つとなりうる」としている。ある出来事や物事を今までの見方とは違った見方をし、何らかの働きかけをすることで雪だるま効果が生じ、さらなる変化を生んでいくことでその意味を変化させ、気分や感情を変えるのであるとされている。

「BM」とは、ブリーフ(短期)のミーティングであり、リソース(資源)を生かし、今日のゴールに向け、30分アプローチしていく会議である。資料も使わず、進行役の進行のもと、ホワイトボードに書き込まれる情報を見ながら、自分事として「自我関与」し、参加者全員が一つの頭脳となり、次なる一手を探る会議である。「解決思考」の解決は、「問題解決」ではなく「新しく何かが構築される」ことであり、原因を追及しすぎないで「解決の構築」で「よりよき未来の状態を手に入れること」を目指す。「なぜうまくいかないのか」

から「どうしたらうまくいくのか」への考え方の転換をするためには、「うまくいっている状態では、どのようなことが起きているか」について考えることが重要であると述べられている。

きら星学級では様々な支援を必要とする児童生徒への合理的配慮や支援が求められるため、担当教諭や担当支援員だけでは課題への対応に限界がある。そこで、「チーム教育相談課」として「むぎほ学級」や相談室「はりゆん」と共に週1回「BM」を行った。会議の流れや時間が明確で構造化されており、内容がホワイトボードに視覚化され、軸がぶれることなく、具体的な対応策にたどり着くことができる。さらに、他者との協働の中で自分の思考を表現することが参加者全員の刺激になり、回を増すごとに参加者全員の支援に対する学習を深めることができるのである。「BM」を定期的に行うことで、参加者全員が解決思考の考え方を学び、実践することで、児童生徒の個別最適な支援となる。(図4参照)

(4)児童生徒の変容が可視化できる報告書

きら星学級に通級している児童生徒は3ヶ月の支援を基本とし、毎月支援経過報告書を在籍校に提出し、児童生徒の支援の様子を情報共有する。

本年度は、支援経過報告

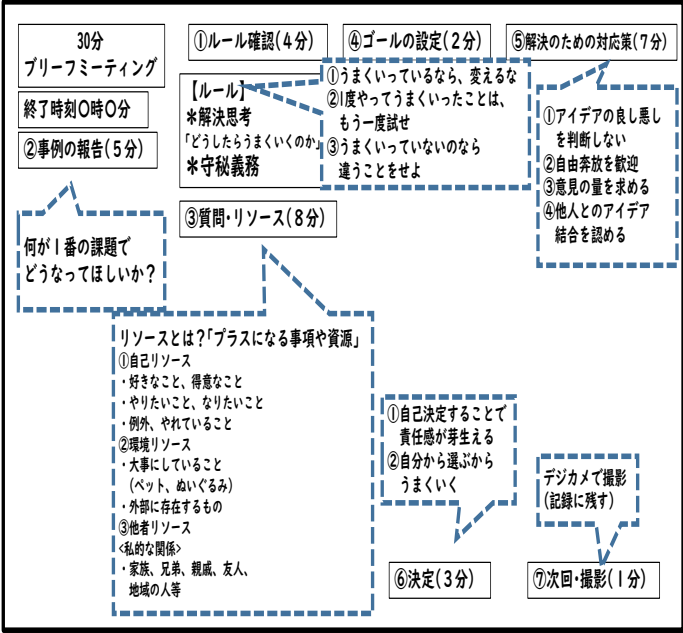


図4 ホワイトボードの掲示内容と内容説明

表2 支援計画報告書一部抜粋

期日	出席	活動内容	活動場所	アウトリーチ	活動時間	備考	支援観点
11月14日	月	出席	学習活動 創作活動	きら星第1教室	10:00 ~ 12:30	社会の仕組み、サンゴ礁の生態	思・科・道
11月15日	火				10:00 ~ 12:30		
11月16日	水	出席	学習活動 レク活動	きら星第2教室	10:00 ~ 12:30	英語の基礎、大企業	知・道
11月17日	木				10:00 ~ 12:30		
11月18日	金				10:00 ~ 12:30		
11月19日	土				10:00 ~ 12:30		
11月20日	日				10:00 ~ 12:30		
11月21日	月	出席	学習活動 創作活動	きら星第1教室	10:00 ~ 12:30	英語の基礎、テクノロジー、バスケット	思・科・道
11月22日	火	出席	家庭作業	緑谷第1	9:00 ~ 14:30	小集団活動	学びに向かう力
11月23日	水				10:00 ~ 12:30		
11月24日	木				10:00 ~ 12:30		
11月25日	金				10:00 ~ 12:30		
11月26日	土				10:00 ~ 12:30		
11月27日	日				10:00 ~ 12:30		
11月28日	月	出席	学習活動 創作活動	きら星第1教室	10:00 ~ 12:30	社会の仕組み、テクノロジー、バスケット	知・道
11月29日	火				10:00 ~ 12:30		
11月30日	水	出席	相談・面接 創作活動	きら星第1教室	10:00 ~ 12:30	英語の基礎、テクノロジー、バスケット	学びに向かう力

書に新たに支援の観点の欄を設け、児童生徒の自己肯定感の高まりが感じられた活動について表記することとした。表2の生徒は毎回、主体的に学習を行っており、支援終了後も継続した学習活動を希望していた。支援終了後の登校はまだ難しい状況のなかで次の手立てとして、教育相談課内の学習室「ていんぼう」に繋げることにした。

また、支援経過報告書には支援の結果として、「成果」と「課題」と「支援策」を毎月、在籍校と共有している。児童生徒にどのような変容が見られ、課題に対してきら星学級ではどのように支援をしているのか、その中で支援終了後の児童生徒支援について見通しを示すことも支援経過報告の重要な役割となっている。(図5参照)

<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最終月になり、自発的な発言や行動が多く見られ、活動に対してもより積極的に取り組む様子が見られた。 ・庁外での体験活動にも挑戦し、講師の方の説明を聞いて作業を行う事ができていた。 ・きら星の活動の帰りに、学校に寄って正門付近まで行き、担任の先生と課題のやり取りをすることができた。 ・持参した問題集を解くなど、学習意欲が見られたため、ていんぼう教室の体験をし、きら星終了後も学習できる場として意識することができた。 ・農業体験(小集団活動)に意欲的に参加し、初対面の児童と話したり、活動したりと楽しんでいる様子が伺えた。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校での活動に対しては、他者からの視線が気になり、難しいと言っていた。 ・正門よりも中に入る事はできなかった。また、生徒の笑い声が聞こえただけで、敏感に反応して後ずさりする様子も見られた。 ・作品を作る過程で、支援員に頻繁に確認する様子が見られ、不安が高いように感じた。 <p>【支援策】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後も本生徒が安心して学習できる居場所として、ていんぼう教室に繋げていく。 ・担任の先生との課題のやり取りを継続的に行うことで、学校に行くこと自体に慣れていく必要があるだろう。 ・今後も、頻繁に確かめようとしたり、意見を求めたりする場面になった時に、その都度、声掛けをしたり、生徒の意見を聞いてあげることで不安が軽減されると考える。 ・今後も農業体験(小集団活動)に定期的に参加することで、少しずつ集団に慣れる機会を設けたい。
--

図5 支援経過報告書一部抜粋

Ⅵ 結果と考察

1 「作業仮説1」の結果と考察

解決思考の「BM」を定期的に行うことで、多面的・多角的な視野からの支援計画を作成することで、児童生徒は個の特性に応じた支援を受けることができるのであろう。

【結果】

教育相談課の「きら星」学級と「むぎほ」学級、相談室「はりゆん」の3つのチームで週1回30分の「BM」を定期的に行った。支援員が抱えているケースの課題点について事例報告をし、それぞれが具体的な行動レベルで考える「解決思考」な意見を出し合った。

参加した支援員のアンケート結果より、「『BM』を行うことが支援員として多面的・多角的な支援計画の作成につながったか」の問いに全員が肯定的な回答であった。また、「『BM』を行うことが児童生徒の個別最適な支援を計画する際に必要だと感じた」の問いも全員が肯定的な回答であり、参加した支援員が「BM」の必要性を感じている結果であった。

また、「BM」後の振り返り(図6)からは、「BM」は新たな気づきや発見に繋がり、支援の幅が広がったという意見が殆どであった。また、参加した支援員個々の支援計画を立てるための学びに繋がっていることや、実際に支援で用いることで効果を表している様子についても記述していた。

- ・原因追及でなく解決思考なアプローチを提案することより支援に前向きになった。
- ・自分では思いつかない柔軟な発想を聞くことで支援内容の幅が広がった。
- ・解決思考の支援方法を計画する練習になり、自分自身の支援に繋がる。
- ・実際に使われた支援方法を取り入れたことにより、生徒が進路に対し前向きになる一助になった。
- ・学校の職員も含めてBMができると今後の支援計画やそれぞれの役割を明確化することができる。

図6 参加者の振り返りより

【考察】

支援者は児童生徒に対して支援の考え方や取り組み方が単調なものになり、その状況に気づきにくくなっていることがよく見られる。児童生徒への支援が、個の特性に応じた支援になっているのか常に振り返るためにも「BM」の手法によって、他の支援員の意見も取り入れながら支援を計画することが重要である。

そこで「BM」を定期的に行い、参加者が事例報告に対して、その現状や課題を異なる視点で意見交換することを行った。その結果、それぞれの立場や経験等から事例報告者が気づかない発想や支援方法を構築し、参加者全員で共有する場面が多々見られた。「BM」を繰り返し行うことで事例報告者と参加者自身が柔軟な「解決思考」の考え方を身につけることへの学習が深まった。「BM」開始当初は課題の原因究明に意見が傾くことが多かったが、回を重ねるごとに参加者全員が「解決思考」のアプローチにシフトしていくのを感じることができた。私自身、進行役として参加者の考え方や物事の捉え方に変化を起こすための「解決思考」の発想を意識していくうちに、感情を落ち着かせ、物事を柔軟に捉える姿勢が身についてきたのを感じた。「BM」は事例報告者だけではなく参加者全員の学びに繋がる。「BM」で身につけた事象に対する考え方が新たな気づきを生み、参加者それぞれの支援計画に活かされることが児童生徒にとって個の特性に応じた支援に繋がったと考察できる。



図7 BMの様子

2 「作業仮説2」の結果と考察

児童生徒の内面を見とる「ふりかえりカード」の内容を工夫することで、学校は児童生徒の理解につながり、児童生徒は自分自身の変容に気づくことができるであろう。

これまで31名の児童生徒に「ふりかえりカード」の記入を行ってもらった。

検証1

「これまでの気持ちを教えてください」の質問で選択肢を13項目設け(図8)、児童生徒が選択した数の平均を支援開始前、支援終了後でどのように変化したのかを検証した。(図9) 小学校児童では支援開始前では5.4ポイントという結果であり、支援終了後では0.5ポイント増加の5.9ポイントという結果であった。中学校生徒では支援開始前では4.7ポイントという結果であり、支援終了後では2.4ポイント増加の7.1ポイントという結果であった。また、児童生徒全体で支援開始前は、4.5ポイントという結果で、支援終了後では、2ポイント増加の6.5ポイントという結果であった。小学校児童、中学校生徒、共に増加していたが、中学校生徒

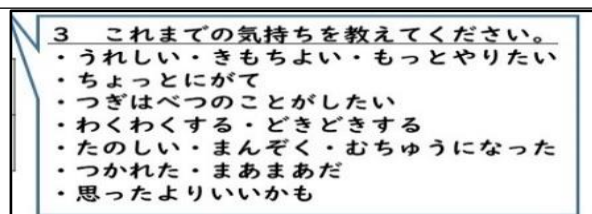


図8「ふりかえりカード」気持ちの選択肢13項目

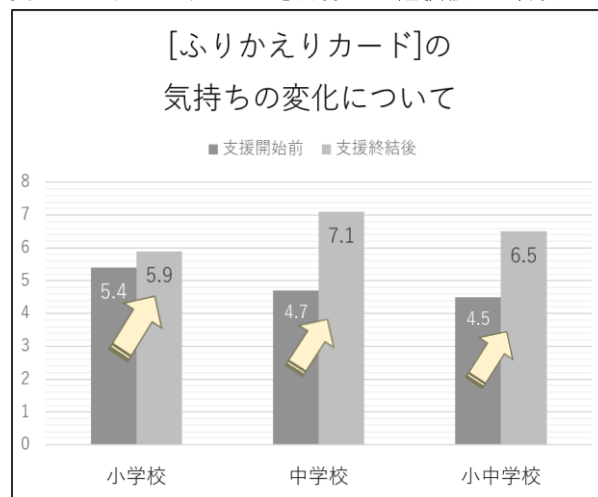


図9「ふりかえりカード」気持ちの変化について

の増加率が高いという結果であった。

検証 2

支援終了後の「ふりかえりカード」から「今までにない新しい気持ちや感覚を持つことができた」と回答した児童は、以下のような結果であった。小学生児童では、15 名中、12 名
中学生生徒では、16 名中、13 名が新しい気持ちや感覚を持つことができた。(図 10)

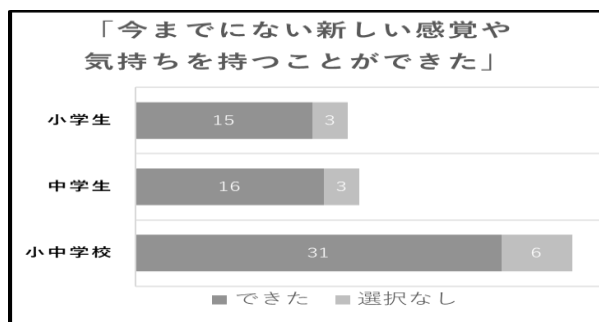


図 10 「ふりかえりカード」今までにない気持ちについて

検証 3

支援終了後のふりかえりカードでは、「きら星学級」での支援が終わって次にチャレンジしてみたいことについて図 11 のような回答結果であった。きら星学級で行った活動の継続や、さらに発展させた活動、中には支援では取り組めなかった学習活動にも興味関心を示している内容が記載されていた。

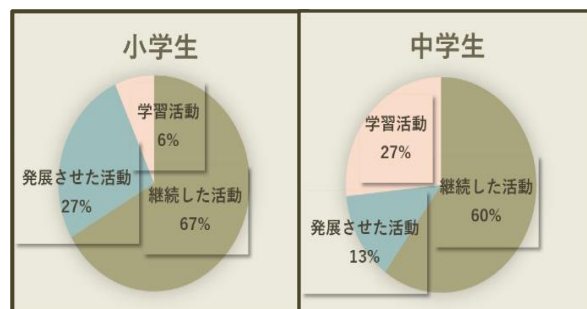


図 11 次にチャレンジしてみたいことについて

【考察】

検証 1 が示す結果で、支援開始前の児童生徒の気持ちに関する項目では、選択数が支援終了後に増加しており、きら星学級での活動が児童生徒の自己肯定感を高め、変容をもたらす結果となった。その理由として、きら星学級で様々な体験活動や第三者(支援員)との関わりを持つことが児童生徒の気持ちに影響を与えたと考える。また、定期的な「ふりかえり」活動を行うことで、支援開始前と支援終了後の自身の変容を比較、確認することができた。その結果、支援開始時に自己表現が乏しい児童生徒は素直な気持ちを表現することができるようになり、エネルギーの高い児童生徒は、主体的な意思表示による活動が可能となった。

検証 2 が示す結果は、児童生徒がきら星学級で活動してきた中で、自分自身の気持ちや感覚の変容について約 8 割の児童生徒が肯定的に捉えていた。その理由として、「きら星学級」の支援が、自分の興味関心のある活動であったことや、その体験を支援員に褒められたことで成功体験として認識することができたことを児童生徒が回答している。個の特性に応じた支援計画に基づき、様々な体験活動を行うことが自分自身の変容について考える機会となった。それが自分自身の良さや可能性を認識することに繋がり、児童生徒の自己肯定感が高まったといえる。

検証 3 が示す結果は、児童生徒が支援終了後に、自身の日常生活に新しいイメージを持たせることに繋がっている。これまできら星学級で取り組んできた様々な体験活動をヒントに支援終了後に自分に取り組みたい活動を見つけることができた。三ヶ月間の支援の中で第三者(支援員)と関わり、様々な活動を行うことが児童生徒の自己肯定感を高める結果となった。

学校も検証 1、2、3 を「ふりかえりカード」で確認することで、学校では見るのでできなかった児童生徒の姿を知ることができた。また、支援終了後の学校職員に対して実施したアンケートからも児童生徒の理解に繋がったと回答していた。(作業仮説 3

の結果に示す)

3 「作業仮説3」の結果と考察

きら星学級での支援による児童生徒の自己肯定感の高まりやその他の変容について、具体的に可視化した報告書を作成することで児童生徒、学校、教育相談課で繋がりをもった支援となるであろう。

【結果】

これまで、きら星学級で関わった児童生徒の在籍校の関係職員(主に担任)に支援終結後アンケートを依頼し、23校から回答を得た。児童生徒の変容についての問いでは、報告書の活動計画や所見からは、興味関心のある活動で楽しんでいる様子や、様々な体験活動の様子から、児童生徒の学校に対する気持ちの変容等の情報共有ができた。また、支援終結後の児童生徒と学校との関わりに役立ったという回答が多く、学校復帰に繋がらなくても、学校や関係機関との関係性の再構築につながったという回答もあった。(図12参照)

- ・きら星学級での支援で児童生徒の好きなこと、得意なこと、苦手なこと等に取り組んで頂けたので自信につながった。
- ・様々な活動を通して、児童生徒の得意なことや興味があることを引き出して情報を共有してくれたので、その中でコミュニケーションをとることができた。
- ・学習への意欲が行動に変えられて、実行するようになった。
- ・支援員と一緒に活動することを通して、エネルギーの発散ができ、自分を見つめなおすことができ、おだやかに話ができることが増えた。
- ・進学についても、生徒が相談してくれて、目標を見つけることができた。
(支援にて進路学習に取り組んだ)
- ・興味関心があることを体験させることで学校へ登校できるようになり、学校に対し、前向きな様子が見られた。
- ・登校できていないが、きら星に行くことで外に出て、体験が増え、楽しそうな様子を話せた。
- ・支援終結後、登校は難しいが、外部支援を受ける意欲、きっかけとなった。
- ・児童生徒だけでなく保護者とも距離が縮まり、支援終結後面談を行うことができた。
- ・児童生徒に優しく寄り添った支援で学校登校につながった。そして児童生徒や家庭の状況など新しい情報を得ることができ、学校での対応に活かすことができた。

図12 学校関係職員のアンケートより一部抜粋

【考察】

学校は、きら星学級からの毎月の報告書の内容を通して、児童生徒が個の特性に応じた支援計画の実施において様々な活動の場面で、児童生徒の内面的・表面的な変容について知ることができた。

また、支援員は支援の「成果」「課題」「支援策」を在籍校と共有することで、児童生徒の状況がどのような段階にあるかを再検討し、次の支援計画に活かすことができた。さらに、支援終結に向けてステップアップするため、支援策を教育相談課内で協議し、多面的・多角的な視野から具体的な内容を可視化した報告書の作成することができた。その結果、支援終結後の切れ目のない支援の実施について学校と情報共有し、引継ぎすることができた。

VII 成果と課題

1 成果

- (1) 教育相談課で解決思考の「BM」を定期的に行うことで参加した支援員それぞれが自己の偏りを修正することができた。
- (2) 児童生徒が様々な体験活動を行う中で定期的に「ふりかえり」を行い、自身の変容を確認することで、自分自身の良さや可能性に気づき、自己肯定感を高め、次の目標設定を行うことができた。
- (3) 学校が「ふりかえりカード」を確認することで、きら星学級での児童生徒の内面がどのように変容していったのかを知ることができた。
- (4) 特別研究員と支援員で毎回支援の振り返りを行い、児童生徒の状況に応じて、ステップアップした児童生徒の支援計画を立てることができた。
- (5) 管理職や担任、指導主事等と連携することで、児童生徒に寄り添った支援を行うことができた。
- (6) 毎月の報告書の中で次の月の支援計画や支援終了後の児童生徒の支援について学校と教育相談課及び家庭と共有し、切れ目のない支援を行うことができた。

2 課題

- (1) 教育相談課の事業を学校現場に周知するための工夫改善が必要である。
- (2) 支援終了時の児童生徒について切れ目のない支援の実施が求められている
- (3) 教育相談課で行った個別最適な支援を継続するために、学校内で学校独自の具体的な支援計画をたてることが重要である。

《主な参考文献》

『児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する諸調査結果の概要』

文部科学省 2021

『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)【概要】』

中央教育審議会 2021

『不登校に関する調査研究協力者会議報告書～今後の不登校児童生徒への学習機会と支援の在り方について～』

不登校に関する調査研究協力者会議 2022

『生徒指導提要(改訂版)』

文部科学省 2022

『30分で会議が終わる!職員室に変化を起こすブリーフミーティング』

学事出版株式会社 2022

『<森・黒沢のワークショップで学ぶ>解決思考ブリーフセラピー』

本の森出版 2002

『上手な登校刺激の与え方～先生や家庭の適切な登校刺激が不登校の回復を早めます!～』

ほんの森出版 2003